

論文

## ジャック・ロンドンと椋鳩十 —新資料を読む

森 孝晴<sup>1)</sup>

1) 891-0197 鹿兒島市坂之上 8-34-1 鹿兒島国際大学

### 1. 新資料発見の経緯

鹿兒島国際大学の考古学ミュージアムでは、2015年の7月24日から12月4日までの約4カ月間、平成27年度特別企画展として「椋鳩十の世界—自然と国際性の文学—」という展覧会を開催した。さすがに椋鳩十は今でも人気が高く、1014名という多くの見学者を迎えることができた。中には、椋のご長男久保田喬彦氏や教え子で親族の畠中信子氏も含まれていた。9月23日にはこの企画展を記念して鹿兒島国際大学で椋の代表作のアニメ化作品『マヤの一生』の映画観賞会も開催され、多くの参加者を集めることができた。

私も主催者の一人として、大学の博物館実習施設の学芸員鐘ヶ江賢二氏や学芸員課程の学生たちと協力して展示の準備に関わった。実習施設の関係者のご協力により、多くの見学者に会場していただけだったが、展示の内容も初めて公開される資料や10数年ぶりの公開という資料もあって、見る価値の高い企画展になったと自負している。上映した

『マヤの一生』も、私が会長をしている松風会（椋鳩十の顕彰と椋文学の普及を進める会）の協力もあって、上映以来実に約20年ぶりに再上映される運びとなったのだ。

この企画展の展示物は、森の私有するものも若干提供したが、ほとんどは椋鳩十文学記念館、かごしま近代文学館、椋の教え子の畠中信子氏、松風会事務局長の畠野洋子氏からお借りしたものであった。御世話になった各施設、その職員の皆さん、各氏には、心よりお礼申し上げたいと思うが、まさにこの企画展の準備をする作業の中で新しい貴重な資料が見つかったのだ。それは、椋の自筆の原稿などを貸してもらうために加治木にある椋鳩十文学記念館を訪れた時のことだった。

実は、私の著書にも言及があり写真も掲載してあることだが（森2014：96）、同記念館の中に設置されている透明ケースの中には椋が学生時代に愛読した原本とされる『ハヂ・ムラート』（トルストイ著）が常時展示してある（写真1）。そしてこの本の中表紙の右隣の白いページに

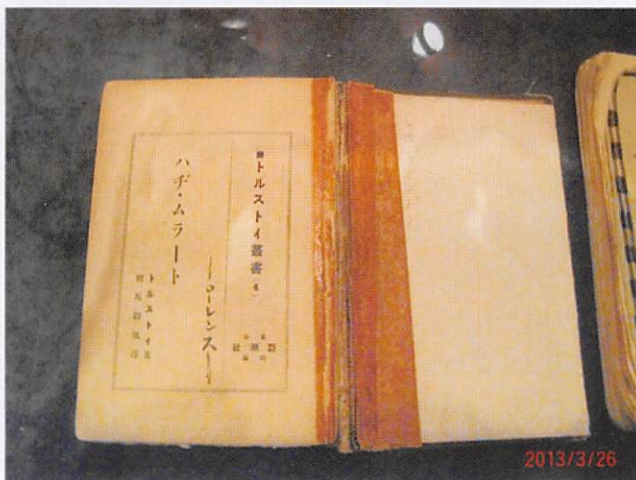


写真1 椋鳩十が愛読したとみられる『ハヂ・ムラート』  
（トルストイ著） 椋家提供、椋鳩十文学記念館所蔵

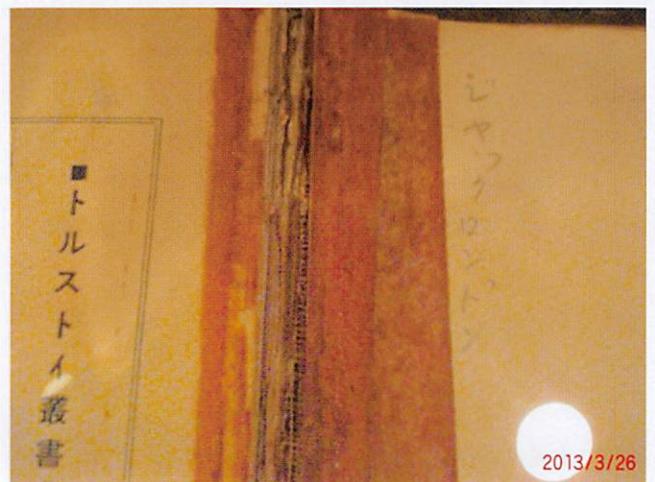


写真2 『ハヂ・ムラート』に記された「ジャック・ロンドン」  
の文字 椋家提供、椋鳩十文学記念館所蔵

は〈ジャック・ロンドン〉という文字が書いてあるのだが(写真2)、この本は閉ざされたケースの中に置いてあるし、その文字も新しく書いたものではないので、椋の自筆であることは間違いないと思われる。

さて、そこまではこのたびの企画展のための資料を借りるために同記念館を再訪する前にわかっていたことであるが、今回訪れた際に私は、椋の書齋が再現されたコーナーに特別に入れていただき椋の蔵書を再調査させてもらい、そのうちの1冊と例の『ハヂ・ムラート』を個人的にお借りすることができた。書齋の中の1冊とは実際に椋が読んだであろう『ジャングル・ブック 白い牙』(キップリング、ロンドン著)である。これに『ハヂ・ムラート』を加えた2冊を分析したところ新たな情報がいくつも見つかったのだ。企画展のために行動したことが新発見につながったことはとても幸運であった。

## 2. 新発見資料の内容

### 2.1. 『ハヂ・ムラート』に挟まれていたメモ

まず、椋鳩十文学記念館に常設展示されているトルストイの『ハヂ・ムラート』についてだが、前述したようにすでに私は、その中表紙のあたりに学生時代の椋が〈ジャック・ロンドン〉と書きこんでいることは知っていた。しかし今回実物をお借りすることができた私は、この本をべらべらとめくってみた。すると1枚の紙がひらりと手許に落ちてきたのだ。見るとそれはやや大きめのメモ書きで、そこにはいくつかのことが走り書きしてあったのである(写真3)。

今まで私は拙著の中で、椋がいかにロンドンに引きつけられていたか、いかにロンドンの伝記的事実をよく知っていたか、いかに多くのロンドン作品を読んでいたかについて探り当て、書いてきたが(森2014:78-167)、驚くべきことに、このたった一枚のメモの中にそれらのことが集約して書かれているのである。まず、「①ジャック・ロンドン」と記した横にロンドンの代表作である『野性の呼び声』と『白い牙』の名が見える。特に『白い牙』は椋が初めて読んだロンドン作品であり、彼が最も好きだったロンドン作品でもあるし、不思議なことに鹿児島との因縁もある作品である。

そのあとには「短編集」という言葉も見える。ロndonは短い生涯におびただしい数の短編を書いており、短編作家としての評価も高い。そのことを押さえた上のこの言葉であろうし、事実椋はロンドンの短編をかなりたくさん

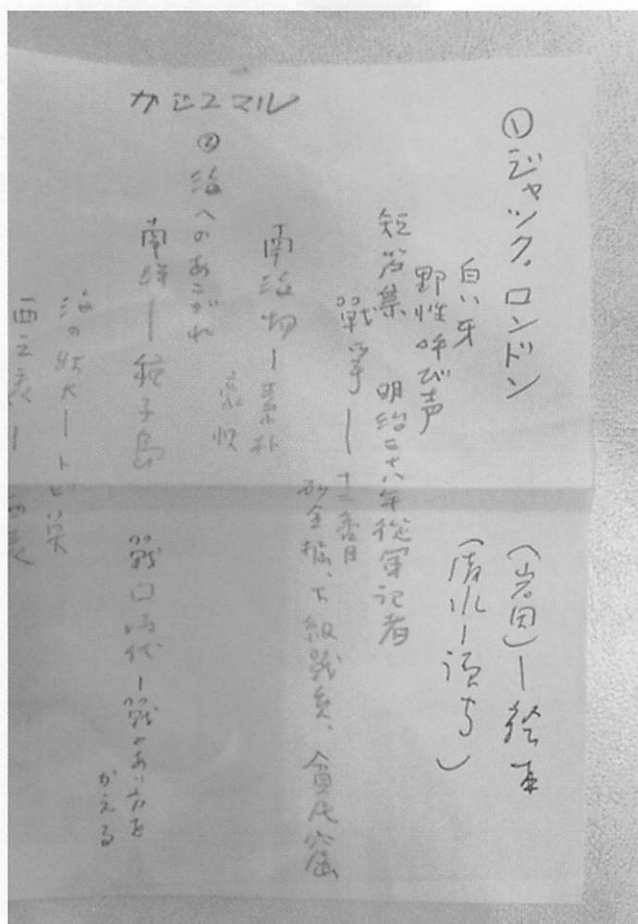


写真3 『ハヂ・ムラート』に挟まれていたメモ

読んでいることもすでに私は突き止めている(森2014:155-158)。それに続くのが「明治三十八年従軍記者」であり「戦争」の文字である。前者はロンドンが明治37年(三十八は椋の勘違い)に日露戦争の取材のために来日しさらに朝鮮半島に渡って鹿児島出身の陸軍大将の下で数カ月にもわたる従軍取材をしたことを示しているが、この事実自体がロンドンの伝記的事実としてはそれほど知られていないことを考えると、椋がロンドンの伝記的情報をかなり持っていたことが知れる。

しかしそれ以上に驚くのはその次の「戦争」の文字である。これはおそらく日露戦争のことではなく、ロンドンが書いた短編小説「戦争」のことであろう。なぜなら、この短編は日露戦争を背景にして日本人偵察兵の運命についてたどった物語だからである。ロndonは日露戦争取材の経験をもとにこれを書いていて、しかもそこには彼があこがれていた武士道精神を書きこむことも忘れていないのだ。実は椋はロンドン作品としてはマイナーなこの作品が気に入っていて、この作品を若い時に読んだ感動について後年に講演で熱く語ってもいるのである(森2014:145-160)。

さて、「戦争」の文字の下にある「十二番目」とは何だろう。



これはおそらくロンドンの短編「戦争」を実際に彼が読んだときの翻訳短編集である和気律次郎訳『強者の力』（大正10年、天祐社刊）（森2014：155-156）における「戦争」がこの短編集の中で何番目の短編だったかということであろう。実はこの短編集には計10短編が収められているので12番目ということはある得ない。だが、この違いはやはりただの記憶違いで、むしろ重要なのは、椋がこの短編集でたくさんのロンドン作品を読んだ記憶が鮮明で、この本の後半に「戦争」が入っていたことを覚えていたことだろう。事実「戦争」は8番目の短編であった。

さらのその下にある「砂金堀、下級船員、貧民窟」とは何のことだろう。「砂金堀」とは、ロンドンが若いころに始まったアラスカでのゴールドラッシュの波にのってユーコン地方で1年間金鉱探しを行ったことだ。「下級船員」とは、金鉱探しよりさらに若いころにアザラシ漁船の船員として世界をめぐることだ。また、「貧民窟」とは、1902年にイギリスはロンドンの貧民街イーストエンドに潜入して取材したことだ。これによりわかることは、椋がそれほどまでにロンドンのことを知っていたということである。

このメモはまだ続く。その左に「南海物—素朴、豪快」とあるのは、ロンドンの短編集『南海物語』のことで、これは椋が法政大学在学中に読み、南への志向が芽生えた作品だ。椋はこの作品も高く評価していて、私はこの作品の影響で椋が山窩小説を書いたと考えている。この作品は、南太平洋の島々で行なわれる戦いを大きなスケールで描いたもので、確かに「素朴」で「豪快」である。

したがって、②として「海へのあこがれ 南洋—種子島」と書いてあるのは、『南海物語』の影響で自分が海へのあこがれを抱き、南洋を目指して南進したものの種子島にとどまってしまったことを意味しているのだ。こうして見てくれば、このメモは椋が、自分がどれだけロンドンのことを知っており、どれだけロンドンの作品を読み、どれだけ影響を受けて南に向かい作品を書いたかを独白しているメモと言うことになるだろう。

## 2.2. 『ジャングル・ブック 白いきば』の「ずいそう」

この本は、すでに述べたように、椋鳩十文学記念館の中に再現されている椋の書斎の窓側にある大きな書棚に並んでいる彼の蔵書の中から見つけた一冊である。この書棚にはロンドンの『白い牙』や『野性の呼び声』が複数散見され、そのことだけでも椋がロンドンに引かれていたことは

十分わかるが、このたび見つけた1969年学習研究社刊の少年少女世界文学全集21『ジャングル・ブック 白いきば』は、前述のメモにも劣らない貴重な情報を与えてくれた。

この『ジャングル・ブック 白いきば』は、ラドヤード・キップリングの『ジャングル・ブック』とジャック・ロンドンの『白いきば』が一冊に収められたものである。監修の一人には志賀直哉が含まれており、「白いきば」と題する「あとがき」は阿部知二が書いている。そしてこの「あとがき」のすぐ後に、椋が「少年の日の感動」と題して「ずいそう」を掲載しているのだ。4ページに渡る力の入ったエッセイだが、ここに全文を引用する。ただし、原文にふつである振り仮名は省略したことをお断りしておく。

わたしは、長野県の伊那谷の、ほんとに奥まった山村で、少年の日をすごしました。

わたしのそだった村は、現在もまだ、村のままのこっています。

その村は、南アルプスのふもとにありました。高台にのぼると、夏でも雪のある峰みねが、かなたの空にかがやいて見えました。

こういう奥まった山里でしたので、人をおどろかす事件なんて、めったなことではおこりません。きのうもきょうも、なんの変化もない時が、しずかにしずかにながれていくといったところでした。おとなにとっても、子どもにとっても、刺激的なことが、きわめてすくないところでした。

そういうせいであつたのかもしれませんが、少年の日に、心をつよくうたれたもので、

現在も印象ぶかくのこっているものといえば、ほとんどが、本からうけた感動のようです。

少年の日の感動というものは、かんがえてみると、なにか、人生の神秘的なふかいものにつうじているような気がするのです。

つよい感動をもって読んだ本は、かなりたくさんありますが、いま、しずかに、そういうもののひとつひとつを思いだしてみると、わたしの人生は、そういう一連の感動の方向にむかって、知らずしらずのあいだに、あゆみよっていったのではないかとかんがえられるのです。

ジャック＝ロンドンの「白いきば」は、その代表的な感動の書のなかに入れてよいものと思います。いまから四十年もまえに読んだ本なのですが、あのかの感動も、物語のなかの、ある個所の文句も思いだすことができま

す。

少年の日の感動というものは、こんなにふかいものであったのかと、いまさらおどろくほどです。

そのころ、わたしの読んだ「白いきば」は、少年のためというより、おとなのために訳されたものであったような気がします。ずいぶん、むずかしいことばづかいでした。

けれど、「白いきば」は、最初のページからわたしをひきつけました。

「地上のものいっさいが、こおってしまって、死を思わせるような、地の果て、そういう地上で、自然に挑戦をこころみる生命があった。それは、やせほそって、そりを引く犬と、まゆ毛もこおって、ふぶきのなかをあるいていく人間。そして、その上には、息たえたなかまの死がいが、箱にいれてのせられていた。」

という意味のことがらが、ジャック＝ロンドン一流の、ぐいぐいとしたつよいタッチでえがかれているのでした。はじめから、ぶんぶんするようなロマンがただよっているのです。第一ページから、わたしは、目をかがやかして読んでいくのでした。

そして、この物語には、つぎつぎと、大きなやまが、まちかまえているのでした。はじめからおわりまで、ためいきをついたり、手をにぎりしめたりする場面がつづくのでした。

読み終わったあとも、大自然のきびしさや、そのきびしさゆえに、美しい自然が、また、不正なものへの憤りや、「白いきば」の絶望的な苦しみ、そういうもののなかから、みずからの手で、生きる道を発見していく、たくましい美しさ、こういうものが、鮮明に、わたしの心に、かたりかけてくるのでした。

このかたりかけは、何か月かたったのちも、なにかことにふれるたびに、とつぜん、心のなかで、目をさますのです。いろいろな意味を込めて、「白いきば」は、わたしを勇気づけてくれたような気がします。

中学校をでて、東京で学生生活をおくっていたある日のことでした。わたしは、神田の古本屋を、なにを買うというあてもなく、ぶらりぶらりと、ひやかしてあるいていました。

そのわたしの目に、ふと、とまったのが、ジャック＝ロンドンの「強者の力」という、和氣律次郎の訳した本でした。

わたしは、胸がドキドキしました。とつぜん宝物を見

つけたような、大きなよろこびをかんじました。少年の日の「白いきば」への感動が、何年かぶりに、ぱっちり目と目をさましたのでした。わたしは、大急ぎで買ってかえりました。

これがまた縁になって、わたしは、ジャック＝ロンドンのものがありさえすれば、かたっぱしから手にいれました。丸善で、かれの「南洋物語」を見つけたときは、とびあがるほどのよろこびようでした。語学のとくいではなかったわたしでしたが、ジャック＝ロンドンがすきであつたばかりに、辞書をひきひき、半年以上もかかって読んだものです。一字一字、苦勞して読んだものは、また、とくべつに心にのこるものです。

ロンドンの、この「南洋物語」に、わたしはすっかりとりつかれてしまいました。ジャック＝ロンドンの南洋にいつてみたい、そこでくらししてみたい、と熱にうかされたようにかながえるのでした。学校を卒業すると、郷里をでて、日本を、南へ南へとくだつていきました。けれど、けっきょく、南洋へはいきつけず、わたしの旅は、南洋の孤島、種子島でおわつてしまいました。わたしは、南洋にすみついて、現代の南洋物語を書きたいと思ったのですが……。

それにしても、わたしは、鹿児島にすみついて、もう三十何年かになります。思いもよらなかったことですが、わたしが、この地に、こんなにも長くすみつくようになったのは、これは、ジャック＝ロンドンと、まったく無関係ということはできません。

こうなるまでには、ほかにも、いろいろな原因がありますが、「白いきば」も、その原因のなかまのひとりであると思っています。

少年の日に、「白いきば」という、すぐれた作品に出会い、それに大きく感動したということは、わたしの運命に、大きなかわりあいをもったことはたしかなことです。

「白いきば」は、わたしにとっては、運命の書のひとつであると思われてなりません。(西村、阿部(訳) 1969: 354-357)

この『ジャングル・ブック 白いきば』は1969年1月刊の初版であり、椋は1905年の1月22日生まれだから、ちょうど65歳になる直前に書かれたものと見ることができよう。だから『白い牙』を読んだのは「いまから四十年もまえに」ではなく、実際には50年ほど前のことである。

椋が初めて『白い牙』を読んで感動したのは彼が飯田中学在学中のことだということが分かっているからだ。彼が飯田中学に在学したのは、1918年から1923年までで、したがって年齢でいえば13歳から18歳までだから、すなわち、『ジャングル・ブック 白いきば』のために「ずいそう」を書いた時の44年前から49年前ということになるのだ。

「鹿児島にすみついて、もう三十何年かになります」とも書いているが、椋は1930年（25歳の時）に鹿児島に移住してきているから、これも40年近いというのが正確なところだ。ただ、こういったおおざっぱなところも椋らしいおおらかさだと言えよう。また、「中学をでて、東京で学生生活をおくっていた」というのはもちろん法政大学在学中のことであり、それは1924年から1930年までである。神田の古本屋で「『強者の力』という、和気律次郎の訳した本」を買って帰った、と述べているがこれは正確である。なぜなら、前述したように、和気律次郎訳『強者の力』は大正10年、つまり1921年に出版されていて、椋が大学在学中くらいにちょうど古本屋に出てきても自然なことだからである。

この買い物をしてからほどなくして椋は丸善でロンドンの「南洋物語」（原題が*South Sea Tales*という短編集なので『南海物語』とするのが普通）を見つけたと書いているが、原著の初版が出版されたのが1911年のことだし、この作品に取りつかれて大学卒業後に南を目指したとあるから、この原書を読んだのも大学在学中であることがわかる。この短編集の翻訳書は1925年と1929年に出版されているが、これもちょうど椋の大学在学中ということになる。だから私は拙著の中で、このどちらかの翻訳書（同じ訳が別々のタイトルで出ている）で読んだと結論付けた（森2014：108）が、どうやらこれは間違いだったようだ。この作品を、わざわざ辞書を引き引き半年以上もかかって原書で読んだということは新情報で、「ジャック＝ロンドンがすきであったばかりに」ということばと共に椋がロンドンのことをいかに好きであったかを示す有力な資料である。

次に、この「ずいそう」における椋のロンドン文学批評を見ていこう。まず、『白い牙』についてだが、約半世紀も前に読んだ感動を語るには正確で、記憶している一節すらあるのには驚かされる。椋がこの作品について何と語っているかと言えば次の通りである。

・・・ジャック＝ロンドン一流の、ぐいぐいとしたりつよいタッチでえがかれているのでした。はじめか

ら、ぶんぶんするようなロマンがただよっているのです。た。・・・

そして、この物語には、つぎつぎと、大きなやまが、まちかまえているのでした。はじめからおわりまで、ためいきをついたり、手をにぎりしめたりする場面がづくのでした。

読み終わったあとも、大自然のきびしさや、そのきびしさゆえに、美しい自然が、また、不正なものへの憤りや、『白いきば』の絶望的な苦しみ、そういうもののなかから、みずからの手で、生きる道を発見していく、たくましい美しさ。こういうものが、鮮明に、わたしの心に、かたりにかけてくるのでした。

子供向けの文体にはなっているが、見事な『白い牙』評だと言えよう。強いタッチやロマンを見逃さず、スリリングなストーリー運びを認め、この作品のテーマとも言える「大自然の厳しさ」「自らの手で生きるたくましさ」を指摘するなど、容赦ない自然の描写や原始的生命力や巧みなストーリー・テリングといったロンドンの文学的特徴を余すことなく指摘しているのである。この引用箇所のすこし前でも椋は「『白いきば』は、少年のためというより、おとなのために訳されたものであったような気がします。むずかしいことばづかいでした」と言っている。それもそのはず、もともと原文自体が子供向けに書かれたとは思えないむずかしさを有しているので翻訳も当然難しくなるわけであり、ロンドンの訴えも当時の貧困などの社会問題を背景にしたもので、人間と野性動物がどう共生するかという問題を描いた作品としても読み込めるのだ。

翻訳短編集の『強者の力』も、すでに触れたように椋が『白い牙』と並んで強く感動したロンドン作品「戦争」との出会いを生んだ書なのだ。この翻訳短編集は実はロンドンの出した『強者の力』と同じ構成ではない。和気訳のこの翻訳短編集には7編の短編が収められており、それらはロンドンの『強者の力』に収められている短編と4編しか重なっていない。その上「戦争」はもともとロンドンの原著には入っていないのである。和気がロンドンのいくつかの短編集から選んで訳して書名だけ『強者の力』としたからだろう（森2014：156-157）。

しかし、必ずしも重なっていないことを知らずに椋がこの和気訳の翻訳短編集を読んだことがロンドンの「戦争」と出会うチャンスを与えたわけで、大学在学中に読んだ感動を1983年に78歳の彼が詳細に語るほどこの作品に引き

つけられていたことを知っていた私(森 2014:153-155)は、1969年にこの翻訳短編集を見つけて「わたしは、胸がドキドキしました。とつぜん宝物を見つけたような、大きなよろこびをかんじました」と彼が言っているのを読んで、まさに運命の出会いだったのだと再確認することになった。

最後に『南海物語』に触れよう。この作品について椋は「すっかりとりつかれてしまいました」と言っている。「戦争」もこの作品もロンドン作品としてはマイナーな方に含まれるのだが、実はこの『南海物語』も「戦争」や『白い牙』と並んで彼のお気に入りの作品だったようで、特に『南海物語』は椋の人生を変えた作品でもあるようだ。その件についてもすでに拙著の中で、彼自身の言葉を紹介して実証してきたところだ(森 2014:81-87)が、この「ずいそう」にも私の論を裏付ける発言が見て取れるのである。

『南海物語』に「すっかりとりつかれ」て「南洋にいつてみたい、そこでくらししてみたい、と熱にうかされたようにかんがえ」た椋は、大学を卒業すると「日本を、南へ南へとくだって」行った。しかし、「けっきょく、南洋にはいきつけず、わたしの旅は、南海の孤島、種子島でおわってしま」ったのである。こうして鹿児島に永住することになる椋は、その経緯について次のように語っている。

・・・思いもよらなかったことですが、わたしが、この地に、こんなにも長くすみつくようになったのは、これは、ジャック＝ロンドンと、全く無関係ということはいけません。

こうなるまでには、ほかにも、いろいろな原因がありますが、「白いきば」も、その原因のなかまのひとりであると思っています。

このあとの部分でも『白い牙』が「わたしの運命に、大きなかわりあいをもったことはたしかなことです」と言い、この作品を「運命の書のひとつ」とまで言っている。『アルプスの少女ハイジ』が椋の運命の書としてよく口にするが、『白い牙』も忘れてはいけないのである。しかも、この「ずいそう」をよく読み込むと、ロンドンの『白い牙』と長野・飯田中学時代に出会って非常に感動したことが「強者の力」や「戦争」との出会いを生み、こうした出会いがさらに『南海物語』との出会いも引き寄せて、この書との出会いが椋を鹿児島に引き寄せ永住させるに至った、という連鎖、あるいはつながりを見て取ることができてしまう

のである。

### 3. 新資料から分かること

今回新たに発見された椋の「メモ」と「ずいそう」からわかることは何だろう。それは、私が従来から主張してきた「アメリカ自然主義作家ジャック・ロンドンは、椋鳩十に文学的影響を与えた作家のひとりであり、最大の影響を与えた作家である」という議論を強力に補強するものである。

「ずいそう」などは、たしかに子供向けに書かれたものではあるが、読んでみればわかるように、それは、「ずいそう」と言うよりは彼の本音が吐露された「告白」とも言えるような文章である。『南海物語』を椋が原文で読んでいたことは新発見であったし、「『白い牙』が鹿児島永住の原因の一つ」というような語り方も初めて聞くものである。

「メモ」についても、これが挟まれていた『ハヂ・ムラート』の中表紙の付近におそらく飯田中学生だった椋が〈ジャック・ロンドン〉と書きこんでいたことを考え合わせるとなかなか面白い。「メモ」が書かれ挟まれたのは、内容から考えて、この書を彼が読んでからずいぶんたったのこと、少なくとも鹿児島に来てからのことだから、何かジャック・ロンドンに寄せる非常に強い想いが感じられないだろうか。つまりこの「メモ」は単に椋がロンドンをよく知っているということを示すだけの資料ではなく、「ずいそう」とも合わせて読んでみる時、椋鳩十や椋文学の本質をも感じさせる貴重な資料になっているのではないだろうか。

### 文献

森 孝晴 (2014). 『ジャック・ロンドンと鹿児島』 鹿児島：高城書房。

西村孝次, 阿部知二訳 (ラディヤード・キプリング, ジャック・ロンドン著) (1969). 『ジャングル・ブック 白いきば』 東京：学習研究社。